

《さー……》

(雨振る音)

《ばたばたばた》

(走り寄って来る足音)

(縁側に腰掛け、雨が降る外を眺めている“あなた”。
強まる雨脚をぼんやりと見つめていると、足音が近付いてくるのに気付きそちらを向く)

ナコ

「おお、ここにおったのか！ うむ、今戻ったのじゃ！

軽く外を見てきたのじゃが、ちと……雨脚が強くなりそうじゃったのう。

帰り道を教えてやると言っておいて何じゃが、この雨で帰らせるのはその……のう」

(ナコの様子に“あなた”は頷き、仕方が無いと返事をする)

ナコ

「んっ、そ……そうか？

そう言ってくれるのであれば、ワシとしては安心出来るのじゃが。

……すまぬのう、約束しておったというのに、今日帰してやれそうになくて。
泊まってくれるというのであれば……うむ！

今日も、お主の世話はちゃんとさせて貰うからの！ うむ……うむっ！」

《……ぴと》

(そつと近付き、“あなた”の横にナコが座る音)

(そろり、と。

ナコが“あなた”に近付き、ちやこんと腰を下ろす。

視線は外の降り続ける雨へと向けられている)

ナコ

「んっ……隣、座つても良いかの？

……ふふ、有難うじゃ」

……まだ雨脚が強くなりそうじゃのお」

ナコ

「普段ならば気にもしなかったのじゃが……こうしておると雨の音以外にも色々聞こえるものじゃな。

時折何処かの草むららがざりと揺れる音、木々に当たる雨粒が葉を弾く音。

雨の中にも色んな音が混ざっておるようじゃ……。

それに、何より……隣にいるお主の音が、よく……聞こえるの」

《さら……》

(衣擦れの音)

ナコ

「ふふ」

こうして肩を寄せておると、お主の服が擦れて鳴る音。とくんとくんといい、お主の血が巡っておる鼓動の音。

雨音に混ざって消えそうになりながら、それでも……確かに感じられる音があるものなんじゃないあ」

「あなたに体を預けながら、耳を揺らしながら聞こえる音に感じ入るように瞳を閉じるナコ

ナコ

「ん」くうお……ん」

くふ」……当たり前の事なんじやが、妙にそれが嬉しいのう。

うむ……嬉しくて、ふふ」

何故か……自然と頬が持ち上がってしまうのじやよ。

お主を帰してやれずに、申し訳ない気持ちで仕方が無いはずなのに……何故か、胸が弾んでしまっておる。

……本当に、度し難い狐じやのう、ワシという奴は」

ナコ

「のお、お主……主様？

怖くは無い、かのお？

昨日、主様に情けを頂いてはしたない姿を……お主に縋る姿を見せておいて、今日はこの雨じや。ワシが、主様を帰さぬために、何か策を弄(ろう)しておるなどとは、思わぬ……かの？」

(じい、と。

”あなた”の様子を伺うように、声をかけてくるナコ。

昨日の様子を思い返しながらも、ゆつくりと首を横に振る”あなた”

ナコ

「……思わぬのか？

……ワシが、ろくに力などもうないと言ったからかの？

むう……実は、嘘をついておるだけで、力を隠してお主を誑かそう(たぶらかそう)としておる悪しき妖狐(ようこ)なのかもしれないぞ？

……くやつ！？……まあ、確かに、そんな力があれば、昨夜にあんな醜態は見せぬじやろうけど！

……うー、主様はよう見ておるのう……まったく、見透かされておって恥ずかしいのじや」

ナコ

「くやん……。

ご名答じやよ、主様。この雨はワシとは無関係じや。

もしかしたらそうと思われて怖がられてはおらぬかと思ったが、余計な事だったようじやの、ふんっ！

……まあ、怖がられておらぬのなら、ワシとしては嬉しい限りなのじゃけれどな？……ふふ」

ナコ

「ありがとうじや、主様。

本当はの？……ワシ自身がこの雨に、お主がまだここにいてくれておるのを喜んでしまったもの

じゃから余計に……。

お主が、怖がつて……ワシから離れようとしてしまったらどうしよう、などと……不安になつてしまつただけなんじゃ。

昨日のお主の優しさを知つておれば、そんな事ありえないと分かつておつたはずなのにのう。

……そんな些細なもしかしたらが、今のワシには奇妙なほど恐ろしくて堪らなくなつてしまつて……の」

《さうり……》

(より一層身を寄せ、肌を擦り合わせる音)

ナコ

「主様……。

まだ……昼餉(ひるげ)まで時間もある。

勿論夕餉にも……眠るにも、じゃ。

どうせこの雨では外になども出れぬし……のう？

時間を持て余しておるようならば、どうじゃろう。

……昨夜の続きを、ここで、というのは……嫌じゃろうか？」

ナコ

「思わず手に入れたまだお主といられるこの時間を……ワシは無為に過ごしたくないのじゃ。

主様さえ良ければ、時間の許す限り……雄と雌と重ね合わせ、液を交わらせ、滴り合わせ。

溶け合うように……主様の熱を、感じさせて欲しいのじゃ」

ナコ

「良い、かのう……？

昨日は人肌の温かさに、ただただ乱れてしもうたが。

今日はもう、お主がしつかりとここにいてくれておるのは、分かつておるから……。

お主をより一層感じられるようにより深く、淫らに、溺れるように……肌を重ねさせて貰いたいんじゃ」

ナコ

「んっ……ちゅう、んんうっ」

ふう、んっ、ちゅう……く、や……うんっ」

はう……んっ」

ワシ、お主がしてくれる口吸い……やはり、好きじゃな」

それだけで、心の奥がきゅつと締め付けられて、一緒に暖かくなってくるのじゃ……ふふ」

ナコ

「くおん……♥

うん、では主様……」

時間の許す限り、今度はお互いの存在を確かめ合いながら……深く、感じ合わせよう……のっ♥